
アマオト

社 九生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アマオト

【Nコード】

N7589P

【作者名】

社 九生

【あらすじ】

世界では二つの軍が長きに渡る戦争を繰り広げていた。

『青』を象徴とする『スロウラ』

『赤』を象徴とする『ユニオン』

とある雨の日、負傷したスロウラの少年兵が廃工場へ逃げ込む。しかし、そこには先にユニオンの少女兵がいて…………。

『未来とは果たして自分の手で決められるものなのか』をテーマに描いたSF短編。

死にたくない。

間欠泉のように激しく湧きあがる想いに突き動かされ、少年は降りしきる雨のなかを走っていた。

よるめきながら、荒く息を切らしながら、苦し紛れに逃げ込んだ先は三角屋根の廃工場。

入ってすぐにあつたベルトコンベアの側面にぐったり背中を預けた。

間断なく続いた呼吸の繰り返しに肺と心臓は悲鳴を上げ、意識はざらつき、もう一歩たりとも動けそうになかった。むしろ、ここまで来られたのが奇跡だ。

右足はその付け根の部分から赤い血を垂れ流している。銃弾を受けたのだ。

少年は腰に携えていたポーチから包帯と消毒剤を取り出すと応急処置を始めた。

その作業の間に呼吸は落ちつき、感覚が鮮明になっていくにつれ、あれほど遠くに聞こえていた雨音が自分の耳に収束していくかのようになり立って聞こえ始めた。

しかし、通常の聴覚を取り戻した彼の耳は、雨音に紛れるもう一つの音も捉えていた。

「誰がいるのか!？」

少年は腰のハンドガンに手をかけて天井に叫んだ。

何の音だか判然としないが、ぱち、ぱち、という物音が聞こえた。空耳ではない。いまもお、ぱち、ぱち、つと、薄い木の板をしならせてコンクリートを打つような音がしている。

「ここにいるわ」

少年は素早くハンドガンを抜いて立ち上がった。

「おまえ、ユニオンか？」

「そつちはスロウラ？ わたし、怪我してるの」

「俺もだ」

「お互い休みましょ。殺し合うことなんてない」

少女の声はそつと頬をなでる風のような質感で、高ぶっていた気持ちさが不思議と和んだ。

少年は座り、ハンドガンを腰のホルスターにしまった。

右足の付け根に巻いた包帯には血がにじみ、じりじりと神経を蝕まれるような痛みが先ほどから続いている。この状態で戦闘を行うのは自殺行為だろう、それは相手も同じらしく、少年は少女の言う通りにすることにした。

ベルトコンベアによっかかって身体を楽にし、少年はまぶたを閉じた。雨音が聞こえる。

それは潮騒のようにも、低ボリユームのノイズのようにも聞こえ、少年は身体が音のベールに包まれるのを感じた。

あと半秒で眠りに落ちかけた刹那、一度は過ぎ去った風が少年の下に帰ってきた。

「ここ、何の工場だか分かる？」

うすら目を開け、少年は自分の周りを見渡した。

いびつな形をした木片……パズルのピースが散乱している。

それに紛れて細かく砕かれた瓦礫、ガラス、トタンの破片があった。

少年は特に選びもせず、おもむろに一片のパズルピースを手に取りつた。

「パズルを作る工場？」

「わたしね、子供のころからパズルを作るのが好きなの。

いまじゃ新しい絵が手に入らないから、同じのを何度も崩して作ったりしてただけけど、まさかその工場に来られちゃうなんてね」

一拍、間があった。

「笑わないの？ こどもみたいって」

「いや……俺も、こどもだからさ」

「でも、わたしがごどもなのも今日で終わり」

「？おとな？になるのか？」

「うん。明日、誕生日なんだ」

その一言に少年の眠気は吹き飛んだ。

身体をねじり、少女に訊ねた声はおどろきを含んでいた。

「もしかして、君は第百二十九期のハッピー・バースデイズ？」

「あなたもなの？」

「ああ。俺も、明日が誕生日なんだ」

「そっか。一緒だね、わたしたち」

やがて、また、ぱち、ぱち、という音が静かにこだまし始めた。

少女はパズルを作っているらしかった。一体何の絵のパズルなのだろう、少年は聞いた。

『鳥かごから羽ばたいていく小鳥の絵』

知ったところで、そうか、としか返事が出来ず、空間はまた雨音に満たされた。

「聞いてもいいかな」

「なにを？」

「おとなになつたら、何がしたい？」

「はつきり決めてはいないけど、ネバーランドに行ったら、まずはぐっすり寝たいな」

「そうだね、疲れちゃったもんね、毎日戦ってばかりで」

少女はくすくすと笑った。首元がくすぐったくなるような声。

不覚にも「可愛い」と感じたのを、少年は足の痛みに想いを馳せることで掻き消した。

「君はどうするか決めてるの？」

「約束したの。子供のころ、仲のよかった友達と、また二人で暮らすうって約束。」

それを果たしに行くの」

「その友達って、女の子？」

「ううん。男の子」

ぱち、つと力強い音がした。

ピースをはめ込んだのだろう、少年はあとにも続くその音にしばし耳を傾けた。

すると、途端、けたたましいアラート音が鳴り響いた。

自分の端末ではなく、少女のものからだ。心地よいララバイに身をゆだねていたのを台無しにされた気分、少年はアラート音がなくなった静寂に疑問の声を発した。

「いまのは？」

「爆撃が始まるみたい。退却命令が出た」

「どういうことだ？ スロウラがストラルドブラグを見つけたのか？」

「そうじゃないと思う。きっと、ユニオンもスロウラも見つけてない」

しばし、間。

「信じてくれないと思うけど、わたし、ストラルドブラグと逢ったことがあるんだ」

「本当に？ あの兵士は、本当に不老不死なのか？」

「本当だよ。いちおう、同じ軍だから逢えたの。あの人は何だかって知ってた。どうしてこんな戦争が始まったのか、ネバーランドのこととか、わたしたちハッピー・バースデイズのこととか、世界の秘密を、ぜんぶ。長生きだからね」

「それは知ってる。だから、逃げ出したストラルドブラグをスロウラもユニオンも躍起になって探してるんだ。こっちはユニオンの秘密が知りたいから、そっちは、秘密がばれると困るから。今日の戦いだってストラルドブラグが原因だ。でも、爆撃するってことは…」

…

「殺すことにしたのね、ユニオンは」

ベルトコンベアを二列挟んだ二人の間に、ふっと怪しい光が輝いた。

少年の額にじんわりと冷や汗がにじむ。爆撃？ この辺り一帯を

？ 俺たちごと？

少年は急に心細くなり、先ほどまで何とも感じていなかった雨音が、自分たちを守る防壁のように感じられた。冷気、埃っぽさ、カビの匂いも、全て。

これらが轟然たる爆音と共に吹き飛ぶ瞬間が近いのだと思うと、少年はうつむいた。

「君はストラルドブラグに何を教えてもらったの？」

「わたしが気になってることは、ぜんぶ」

「君が気になってることは、たぶん、俺も気になってることだ」

「教えてほしい？」

「じゃあ、一つだけ聞きたい。ネバーランドってなんだ？」

「ユニオンとスロウラの隔たりなく、人類が共生する自然豊かな」

「それは育成機関で散々聞かされてきた。」

違う。俺が知りたいのは、教科書に載っていない部分だ」

「教えてあげてもいいよ。」

でも、爆撃はもうすぐ始まるから、どこまで話せるかは分からないけど」

構わない、と答えると、少女はまもなく話し始めた。

* * * *

天窓に雨粒が弾けるのを見ていたり、トタンに開いた穴を数えてみたり、先ほど手に取ったパズルピースの線を指でなぞってみたりしながら、少年は少女の言葉を聞いていた。

びしょ濡れになった髪やパイロットスーツが一向に乾かないのと同じように、雨は降り続けていた。約束を交わした日にもこんな雨が降っていた。スロウラの兵士になるため、育成機関を出ていくときに指切りをした女の子の声と、いま、背後にいる、ユニオンの少女兵の声には、どこことなく通じる響きがある。

たった数フィートの距離、さしたる障害物もないのだから、この

目で確かめにいけば一番いい。

だが、それが出来ない身体にさせられてしまった。自分も、あの娘も。

少年は胸の中央を強くわし掴んだ。

こんなものが心臓の隣になれば、今すぐにだってあの娘のところへ行くのに。

「パズルのピースが一つ足りない。これで完成するのにな」

少年はきつく胸を縛りあげていた手をあけ、なかにあったパズルピースを見つめた。

それを少女に渡そうかと一瞬考えたが、ぎゅっと掌を閉じて地面に下ろした。

やがて、雷鳴のような轟音が遠くに聞こえた。

置いた手にかすかな振動を感じる。一度だけではなく、何度も何度も連続して。

「爆撃が始まったみたいだ」

「うん。わたしたち、生きていられればいいけど」

「君だけでも逃げるよ。俺は、足を怪我して動けないんだ」

「わたしも足を怪我したの。それに機体も壊れちゃったし、帰る手段がない」

「祈るか」

小さな天窓を仰ぎながら、少年はぼんやり言った。

黄金色の光は差し込んでこない。鈍色の雲が重々しくのしかかっている。

「いやだね、こういふときも祈るしか出来ないなんて」

「どういう意味？」

妙に引っかかる言い方だった。

「だって、考えてみて。わたしたちハッピー・バースデイズのこと」
少女の言わんとしていることはよく分かった。

試験管のなかで生まれ、育成機関で軍事的学習、訓練を受け、十二回目の誕生日にユニオンか、それともスロウラか、どちらかの軍

に配属される。その際、胸の中央に敵か味方かを識別するバイオセンサーが埋め込まれる。これは効果範囲内で敵バイオセンサーを持った人間を　主に視認することで　発見すると、全神経系に電気信号を伝達、宿り主をトランス状態にする。これによって兵士たちは自我を失って一かからの人間性もない殺戮兵器と化し、この状態は一度認めたバイオセンサーの反応がなくなるまで続く。

すなわち、兵士たちは強制的に、相手が死ぬまで殺し合いをしなくてはならない。

これが彼ら、ハッピー・バースデイズ。

「いままでに何度、俺は自分の頭に弾丸を撃ち込もうと考えたか分からない」

「それはわたしも同じ。ううん、ハッピー・バースデイズはみんなそうだと思う」

「だけど、十五回目の誕生日を迎えて、おとなになること。そうすればバイオセンサーは摘出されて、未来が与えられる。ずっと夢見てきたネバーランドに行つて自分の意思で生きられる。そう聞かされてきた。だから、俺は必死になって生きてきたんだ。誰も彼も殺して」

「そこまで一気に喋ると、しかし、次の言葉からは勢いがなくなつていた。」

「でも、俺たち兵士一人一人には金が賭けられてるんだらう？」

「誰がおとなになるまで生き残れるかって」

「ネバーランドに住む貴族階級の人たちにね。あの人たちは、わたしたちみたいに試験管のなかじゃなくて、ちゃんと母親から生まれた子供たち。人間なのよ」

「俺だつて人間だ。なのになんで、あいつらには俺たちの命を弄ぶ資格があるんだ？」

「分からない。ただ、ストラルドブラグは言つてた。この戦争は？ セレクション？ なんだって。ネバーランドは確かにわたしたちが思う通りの樂園のような国だけど、その住人になるためには資格が

いる。その資格を持つに値する人間を決めるためのセレクションが、このユニオンとスロウラの戦争なんだって。最後まで生き延びた兵士には買い手がついて、誰かに引き取られる。そしてその誰かの？こども？として、また一から育てられるの」「なんだよそれ。未来、自由な未来が与えられるんじゃないのかよ」

少年はピースの角が食い込むほど強く握りしめた。あとは声の出る限り叫んだ。

自分の無力に対して。どんな言葉を持ってもその苛酷さを形容できない自らの運命に対して。実体を伴えばトタンの壁を易々突き抜け、大挙してくる爆撃機の群れを一機残らず撃墜するほどの威力があっただろう。だが、声は声だった。

あたかも全力疾走のあとのように、少年は荒い呼吸を繰り返した。叫んでいる間はほとんど狂乱の態だった。辺りがまた雨音がするだけの静寂に占められていく。が、やがて。

「昔と変わらないね、ジン君」

少年は絶句した。

「わたしたちは感情に乏しい。だって、兵士には必要のないことだもの。」

「ただ、ジン君は、何かに対して全力で怒るし、全力で笑うし、全力で悲しむし。」

初めて逢った時から、ずっと憧れてたんだよ、わたし」

「やや浮かれた声に、少年は少女がにっこりと笑ったように感じた。」

「いつから俺だって気付いたんだ？」

「一言目から」

「飄々としつつ、自信に満ちた声だった。」

少年は微笑を浮かべて、困惑したように数回かぶりを振った。

「このまま名前を呼んでくれないでよかったのに」

「どうして？」

「ネバーランドで逢うって約束だっただろ？なのに、どうしてこ

「こなんだよ」

悔しさに打ち震える声に少年の怒りと動揺を察したのか、少女の声は暗くなった。

「ごめんね」

少年は言葉を失い、やりようもなく天窓を仰いだ。

だが、その小さな長方形がかすかに振動していることには気づかなかった。

「おまえ、本当はどこを怪我してるんだ？」

しばらくして、少女は白状するようにおずおずと言った。

「腕」

「なにが『わたしも足を怪我したの』だよ。おまえのうそは昔っから分かりやすいんだ。

走れるんなら、走れ。どこまでも逃げろ」

「無理だよ！ ジン君を置いてなんていけないよ」

少年はおもむろに立ち上がった。

右足の刺すような痛みを引きずりながら、自分と少女との境界線上に立った。

「ジン君……？ なにしてるの？」

「いまから、そっちに行く」

まぶたを閉じたまま、少年はベルトコンベアの上を歩きだした。

「だめ！ だって、お互いの姿を見たら、わたしたちは」

「大丈夫さ。俺とおまえは約束した。それは絆だ。絆は何よりも強い。」

だから、バイオセンサーの発動なんて、きつと止められるさ」

直後、少女は何かを叫んだ。そこまでの意識はあったが、空間が爆裂したような衝撃と轟音に吞まれてあとのことは分からなかった。

鉄の焦げるような匂いと異常な熱気を感じて意識を取り戻すと、爆撃機に襲われたのだと気付くのも束の間、目の前に瞳が二つ、浮んでいた。火の粉と雨粒が交錯するなか、その青色の瞳はブルーマリンのように澄み、そこから流す一滴のしずくで辺りに立ち込める

黒煙と火炎とを鎮められるのだと少年は直覚した。同時に、その澄んだ瞳を持った人の名も。

「マキア……？」

熱風になびく鳶色の髪、パイロットスーツにくつきりと浮かぶ儂げな身体の輪郭。

マキアだ。マキア・ジュリス。彼女の唇がかすかに動く。少年の名を唱えたのだろう。

「目を閉じる！」

そうしていながらも、しかし、暗闇のなかで二人は銃口を向け合っていた。

バイオセンサーが発動したのだ。

身体はすでに自意識の制御下になく、心が支配されるのも時間の問題だった。

「だめ……だめだよ……呑み込まれちゃう！」

少女が悲鳴にも似た声を上げて戦っているように、少年も奥歯を噛みしめて戦っていた。

自分の心を蝕む存在と。このまま好きな人を殺さなくてはいけない運命と。

だが、それらの存在はあまりにも強大過ぎた。引き金にかけた少年の指に力がこもる。

「俺が俺でなくなる前に……言っておきたい。マキアと出逢えてよかった」

そして、二つの銃声が鳴った。

* * *

まだ動ける、と少女は思った。

朦朧とする意識のなか、仰向けに倒れている少年の下へ地面を這う。

少年のパイロットスーツの色は青、少女のスーツは赤を基調とし

ている。

それぞれ両軍のシンボルカラーだ。

そう、一色、たった一色の違いが、越えられようのない壁になって二人を隔てた。

少年はその壁を砕こうとしたのだと彼女は思う。引き金を引く瞬間、自分がそう強く願ったように。

結果、少女には胸の中央に、少年には額に四十五口径の穴が穿たれた。

一方は即死だった。

弱く開かれた少年の掌に、少女はパズルピースを見つけた。

『鳥かごから羽ばたいていく小鳥の絵』のパズル。

少女はピースを見つめて満面の笑みを浮かべると、そのまま少年の胸に顔をうずめた。

あとの静寂に雨音が響いていく。どこまでも淡然と、何事もなかったかのように。

End .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7589p/>

アマオト

2010年12月29日21時40分発行